

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	丸山 大介
論文題目	現代スーダンにおけるスーフィズムとタリーカ —超越性・規範性・共同性—		
(論文内容の要旨)			
本論文は、現代スーダンにおいてスーフィズム（イスラーム神秘主義と通常訳される）およびタリーカ（スーフィー教団）が、政治・経済・社会的にいかなる意義を有するかを検討することを通して、スーフィズム、タリーカの分析枠組を構築しようとするものである。本論文は7章からなる本文と序章・終章で構成されている。 第1章は、スーフィズムとタリーカを論じる際の理論的問題を取り上げ、超越性、規範性、共同性という3つの鍵概念を導入する。超越性は、神への専心を説く側面である。他方、規範性と共同性は社会的側面にとくに注目し、社会により課される規制と、情動性や共在性に支えられた教団員同士の人間関係を各々指し示す。申請者は、これら三つの要素が交錯する存在として、スーフィズム、タリーカを描くことを主張する。 第2章は、スーフィズムとタリーカがスーダンに広まった歴史的背景について述べる。ここでは、フンジュ・スルターン王国から英国植民地期、マフディー期、イギリス・エジプト共同統治期を経て、独立後のスーダンに至る過程で、スーフィーやタリーカが果たした宗教的・政治的役割の歴史的変遷を論じている。 第3章は、タリーカ諸実践の観察とシャイフ（教団長）へのインタビューを通じて、タリーカ内部におけるスーフィズム理解を明らかにすると共に、マウリド（預言者生誕祭）という機会を通じてタリーカ外部の人びとに向けたスーフィズムやタリーカの展示や掲示内容の分析を行っている。第3章での考察を通じて、スーフィズムとは個人を律し、他者との互惠関係を構築すると同時に、神への専心を通して自身の信仰を高めていくための思想かつ実践として解釈されていることを明らかにしている。 第4章は、政治的な文脈におけるスーフィズムとタリーカの位置づけを論じる。スーフィー、タリーカが、イスラームによる一体性志向という政府の主張を支える役割を果たすと共に、イスラームという単一の理念のもとに多様性を排除しようとする政策に荷担することになっており、政府とタリーカはいわば共犯関係にあると分析する。 第5章は、2012年に発生したスーフィーとサラフィー主義者（イスラーム主義の潮流の人々）との衝突を取り上げて、理想的で規範的な論理とは異なる、スーフィーの現実的な主張や態度を明らかにする。スーフィーは本来、平和と寛容を重んじ、包括性を志向する存在と考えられているが、サラフィー主義者との衝突のなかでは、彼らを厳格で排他的だという理由で非難する。これにより、彼ら自身が排他性を帯びることになったと分析する。 第6章は、タリーカ・スーフィーヤ・サラフィーヤ（スーフィー的サラフィー的教			

団) と自らを表象するルカイニー教団の論理を考察する。一般に対立する存在と考えられるスーフィーとサラフィーを共に称する本教団は、タサウウフ・アッ＝サラフ(イスラーム初期の父祖[サラフ]のスーフィズム)を主張する。アッラーへと専心するだけでなく、倫理的に生きることによって社会の結合をも促すという意味で、この概念を、個人と社会、個人とアッラーとを理性的に結びつける知識かつ実践と分析している。

第7章は、第3章から第6章まで論じてきた内容を、第1章で導入した超越性、規範性、共同性という3つの概念と関連させながら整理する。単独者として絶対的の一者と向かい合う個人は、同時に、世界内存在として生き続ける存在でもある。すなわち、彼／彼女は、アッラーとの関係を意識した上で、再度自己を律すると同時に、改めて他者とのつながりを構築していくのである。タリーカにおける実践者のあるべきスーフィズムの姿とは、超越性、規範性、共同性という3要素が常に循環している状態である。このあるべきスーフィズム・タリーカ像に対し、第5章で述べたように、サラフィー主義者に対する批判の現場などにおいては、外敵を明確に意識し、その外敵との差異化を図っていく過程で、他者を一方的に排除してしまう。この場合、スーフィーは超越性、規範性、共同性の三者関係に生じた軋轢の中で、相矛盾する概念を自己の中に生み出すことになる。このように、3要素が交錯するなかに存在するのが、現代スーダンにおけるスーフィズム、タリーカの姿であると結論づけている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、現代スーダンにおけるスーフィズム、タリーカの実態を詳細に描くとともに、それを理論的に考察しようとするものである。スーフィズムやタリーカは、近代に至ってかつての勢いを失ったとされることが多いが、スーダンでは以前の政権も現政権もタリーカと深い結びつきをもっており、その動向を無視して、現代スーダンを語ることは不可能である。同時に、スーフィズム、タリーカの勢力が依然大きな勢力を有する現代スーダンは、現代イスラーム世界におけるスーフィズム、タリーカ的位置を問うにあたって、格好の題材を提供する。

本論文の学問的貢献は、以下の四点に集約される。

学問的貢献の第一は、スーダンにおけるスーフィズム、タリーカの現状を、さまざまな角度から精緻に叙述し、貴重なフィールドデータを提供している点である。どの章で取り上げる素材も、これまで十分報告・分析されていない事例であるが、なかでも、第5章、第6章で取り上げられるスーフィズムとサラフィー主義との関わりは、本論文が発見した貴重なデータである。スーフィズムとサラフィー主義が敵対する様子を描く第5章に並べて、スーフィズムとサラフィー主義が重なり合う事例を描く第6章を配し、両者の関係が現在進行形で変化しつつあることを活写することに成功している。

学問的貢献の第二は、アラビア語原典の豊富な読解と、長期にわたるフィールドワークのデータ分析の両者を、たくみに組み合わせている点にある。文字文化の伝統を長らく保持してきたイスラーム世界において地域研究を行う場合には、聞き取りや参与観察だけでなく、歴史を遡って史料を渉猟する作業が必要とされるが、本論文はそれを丹念に行っている。他方、フィールドワークは、二年間の長期留学においてのみならず、その後の追加調査も行い、最新のデータまで取り込んだ形で論文を完成させている。十分なアラビア語読解能力・会話能力に裏打ちされて、文献・フィールドの両方のデータが論文に取り込まれていることが、見てとれる。

学問的貢献の第三は、中東地域研究とイスラーム学の双方を架橋している点である。冒頭に述べたように、スーダンでは政権とタリーカが非常に近い関係を持ち続けており、その意味で、スーフィズム、タリーカを論じることは、現代スーダンを論じることに直結すると言っても過言ではない。他方、本論文は現代スーダンを事例として取り上げつつ、スーフィズム、タリーカそのものを見直す作業をも行っている。イスラーム世界中に広がるスーフィズム、タリーカの現代的展開の一つの典型例として、貴重なデータを提供すると同時に、すぐれた考察を加えていると言える。

学問的貢献の第四は、理論構築の努力に向けられる。スーフィズムの分析枠組としては、2002年に東長靖が発表した、倫理・神秘主義・民間信仰の三つの要素からなる「三極構造論」があるが、本論文はこれを下敷きにしつつも、超越性・規範性・共同性という新たな枠組を提唱している。あくまで現代スーダンの事例に沿う形で着実に議論を展開する一方、より大きな視野のもと、イスラーム世界全体のスーフィズム、

タリーカ理解のための理論を打ち立てようとした努力は、大いに評価されるべきである。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 25 年 2 月 5 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。